

研究の動向

「ファッション研究」の研究動向

文化学園大学 工藤 雅人

1. はじめに「ファッション研究」という研究領域

「ファッション研究」の研究動向を素描すること、これが本稿の課題である。

「研究」という語の重なりには違和感を覚えるかもしれないが、あえて重ねて用いている。

あえて重ねた理由の一つ目は、現状において「ファッション研究」なる研究領域が確固として成立しているとは言い難いものの、ファッションに関する研究の動向を示す上ではもっとも適切な呼称であり、ファッションに関する研究動向をまとめた複数の論考においても、すでに「ファッション研究」という言葉が使われているからである（小形 2013; 藤嶋 2019）。

二つ目は、1995年頃に使われていた「ファッション学」との差異と連続性を強調するためである。以下で見ていく通り、「ファッション研究」は先行する「ファッション学」を批判的に継承したものであり、現在に至る研究の流れやその特徴を把握するうえでは「ファッション研究」という研究領域を想定することが有効だからである。

次節で詳述するが、本稿ではおおよそ1990年代から2000年代半ば頃までのファッションに関する議論を便宜的に「ファッション学」と呼び、2000年代後半から現在までの研究群を「ファッション研究」と呼んでいる。

まずは「ファッション学」で目指されていたものがどのようなものだったのか、簡単に振り返ってみよう。

2. 「ファッション学」の構想

1996年にアエラムック「New 学問のみかた。」シリーズ①として『ファッション学のみかた。』が発行された。同書冒頭の鷺田清一「『うわべの学問』と考える人にこの本は無用である。——ファッション学への誘い」には次

のようなリード文がつけられている。

ファッション学が衣服の形態や素材の研究だけでなく、衣服をまとう人間と、それをとりまく生活すべてについて研究する新しい学問だということが最近ようやく理解され始めた。この世界のリード役で哲学者でもある筆者が、読者にその魅力を紹介する（鷺田 1996, 5）

研究上の視点が、衣服というモノからそれを着る人たちや衣服を介してなされる相互行為にまで広がっていることが強調されている。

同書はいくつかのセクションに分けられており、そのなかには「生活美学・被服学の挑戦」というセクションがあり、中川早苗による「被服学の世界」と横川公子による「生活美学の歴史」が収められている。前者では「もの」を研究してきた被服学が「衣服を人間や生活環境との適合という視点」から研究する「衣生活学」へと変化しつつあることが述べられ、特に「からだどころを考える」研究分野の例として被服生理学や被服衛生学が紹介されている（中川 1996）。また、後者は1991年以降の家政学部一新の構想の流れにおいて講座・科目として「生活美学」が新設されていたことが説明され、その背景となるような講座・科目構成の歴史が紹介されている（横川 1996）。

このほかにも、「ファッション学の20人」「文化史の中のファッション」「ファッション論の先駆者たち」「世界のファッション学者たち」などのセクションが設けられており、被服学や家政学をはじめとして風俗学や哲学、写真史や文化史、服装史など様々な既存の研究領域や研究者によって「ファッション学」が構成されていることが同書では示唆されていた。

「ファッション学」をタイトルに冠したもう一つの書籍として1998年に発行された『ファッション学のすべて』がある。同書では20世紀のファッションデザイナーや写真家、思想家やアーティストが中心に取り上げられ、

Masato KUDO

文化学園大学

〔著者紹介〕(略歴) 2005年3月早稲田大学教育学部卒業、2016年3月東京大学大学院学際情報学府博士課程満期退学、同年4月より文化学園大学服装学部助教。

〔専門分野〕社会学、メディア史、ファッション研究。

ハイファッションやサブカルチャーの領域のファッションに対象が限定されていた。同書の目的を編者の鷲田は次のように述べている。

ファッションは閉じ込められること、飼いならされること、惰性化させられることをもっとも嫌う。それはスタイルを更新するためのスタイルとして、支配的なスタイルにたいしてつねにノイズでありつづけようとする。〈新しさ〉という顔つきですら、それが退屈になればすぐに脱ぎ去る。

そういうファッションという現象にふれる学をいま「ファッション学」と名づけるにしても、その方法じたいがファッションナブルでなければならない。つまりつねにスタイルに楯突くスタイルとして、みずからのスタイルに過敏でなければならない。その意味で「学問」にたいするノイズでありつづけなければならない。(鷲田 1998a, 13)

ファッションを「スタイルに楯突くスタイル」として特徴づけ、その特徴を含みこむ学問として「ファッション学」が提示されている。直前の過去をためらいなく否定し新しいものを提示するファッションの「軽薄さ」をあえて体現させたようなこの見方は「衣服をまとう人間と、それをとりまく生活すべてについて研究する新しい学問」という『ファッション学のみかた。』における定義と矛盾するものではないにせよ方向性(分析の視座)を共有しているとは云い難い。

『ファッション学のみかた。』における定義は無関心な人たちにまでファッションが関わっていることが強調されていたが、『ファッション学のすべて』ではハイファッションやサブカルチャーなどの領域に議論の対象が限定化されている。

両者を比較しただけでも「ファッション学」が実体ある学問領域として成立していたとは云い難いことは明らかだ。しかしながら、「ファッション学」なる言葉によって服飾史や被服学、流行論や消費者社会論、社会学や哲学などの既存の研究を融合させながら、ファッションに関する研究領域の創出(あるいは可視化)が試みられていたとみなすことは無理のある理解ではない。

またこれらの議論では、既存の研究をまとめるだけでなく、領域横断的に共有可能なファッションの捉え方も示されていた。そして、この知見は現在の「ファッション研究」にもつながるものである。

以下、3節では「ファッション学」の議論の特徴を確認し、4節で現在の「ファッション研究」の特徴を見ていきたい。

3. 「ファッション学」の特徴

(1) 「パリモード・西洋近代的システムとしてのファッション」への注目

「ファッション学」の特徴の一つは、ファッションをヨーロッパ(特にパリ)中心でとらえる姿勢にあり、これは領域横断的に共有されたファッションの捉え方であった。

より具体的には、①オートクチュールやプレタポルテのデザイナーやその洋服が取り上げられていること、そして②ファッションを西洋中世(ルネサンス)の宮廷に起源をもつ近代的現象としてとらえていること、である。

①についてみてみよう。例えば、山田(1992; 1997)において紹介されている事例の多くはパリコレなどで作品を発表しているブランドである。この中には、コムデギャルソンやイッセイミヤケなど日本のブランドも含まれているが、コレクションブランドであるという点は共通している。

この傾向は、ファッションの歴史を描く研究にもみられる。深井(1994)、柏木(1998)、成実(2007)は、ともに20世紀のファッションをテーマにしたものである。議論の仕方は異なるがシャネルやポワレ、マッカーデルなどのファッションデザイナーを中心に議論が展開されているという点が共通している。

注目すべきは、パリモードが取り上げられていたこと自体ではない。重要なのはこれらを具体例に挙げる前提として、ファッションを西洋に起源をもつ近代的現象とする認識が共有されていたことなのである。

例えば、柏木(1998)と成実(2007)はともに、シャルル・ウォルト(チャールズ・ワース)を紹介しながらオートクチュールの成立を説明することから「20世紀」ファッションの歴史記述を始めているが、これはファッションを消費する中心が貴族からブルジョワジーへと移っていく歴史的变化を象徴する事例だからである。そして、フランス革命によって実現された身分制の(理念的な)否定と衣服選択の自由化が、このオートクチュールの成立の歴史的条件となっていた。

やや脱線するが、美術館などで開催された服飾史の展示(例えば、1980年以降5年に1度開催されている京都服飾文化研究財団(KCI)の「浪漫衣裳展」(1980)、「フォルチュニイ展」(1985)、「華麗な革命展」(1989)といった企画展)を想起すれば、この歴史認識が前提されていたことが理解しやすいのではないだろうか。

このようなファッションの歴史については、Perrot(1981=1985)が19世紀フランスの社会史として詳細に描いている。また、Simmel(1911=1976)は、市民革命以降のブルジョワジーを中心とする流行はそれ以前とは性

質を異にするものであり、差異化と同一化を求めて自己表現としてなされる模倣という相互行為の結果であると指摘している。

両者が強調しているのは、服を着ることやその結果としてつくられる流行が個人のアイデンティティ構築と密接に関連している、ということである。PerrotとSimmelは『ファッション学のみかた』においても紹介されており、これらの議論になじみがある読者には当たり前の歴史認識だと感じられるかもしれない。

しかしながら、「ファッション学」以前の教科書的な書籍には、西洋近代的なものとしてファッションをとらえる認識は見られず、流行が個人のアイデンティティ構築と関連づけて説明されることもなかった。

例えば柳洋子は、流行を「『様式』(style)の大量需要を前提とした社会現象」と定義し(柳1978, 155)、さらにこの「様式」は社会構造を反映するものであると説明している。カーライルやヴェブレン等を参照しながらなされている柳の流行論の焦点は、あくまでも現象としての流行であり、個人の自己表現の結果として流行という社会現象が形成されるという捉え方はなされていない。

「服装社会学入門」という副題がつけられた荻村(1987)においても、流行は「集中的な社会的同調行動によって醸し出される社会現象」として定義されている(荻村1987, 47)。タルドなど複数の理論を紹介しながら流行を複数の類型にわけて説明をおこなっているが、西洋近代的な流行の特殊性への言及はなく、またアイデンティティ構築と流行との関係の強調もなされていない。

一方、同じようにテキストとして放送大学から発行された北山・酒井(2000)では、「近代社会は、身体を差異化する行為を個人の責任において行うことを原則にしたのである」と「差異化機能」という点に近代以前と近代のファッションの決定的な違いがあることが強調されている(北山・酒井2000, 18)。

また、北山(1999)では、ファッションは様々な地域や時代にみられるものではないかという疑問に対して、身分や職業ではなく「個人のアイデンティティは身体表現を通して具体化される、という意識」が社会のいたるところに浸透するようになったのはフランス革命以降だと説明されている(北山1999, 187)。

「ファッション学」の代表的な教科書的な書籍であるFinkelstein(1996=1998)では、近代におけるファッションの役割が次のように述べられている。

「個性」なるものが出現したのは近代になってからのことである。これは個性という概念が、政治や経済をはじめ社会的な再編がおこっていたこの近代という時

期に規定されたからだ。(中略)しばしば表層的とみられているが、ファッションは近代の自己意識の形成に重要な役割を果たしてきたのである。(Finkelstein 1996=1998, 66-67)

ここで示されているのは、階級や職業によって個性が規定されない社会において、ファッションはアイデンティティを他者に提示する役割を担っており、そのようなファッションの在り方は西洋近代(より正確にはルネサンス期の西洋)に起源があるという認識である。

同書の訳者の成実は「fashioned body/fashioned self」の訳語に「身体の成形・自己の成形」を採用した経緯として、フィンケルシュタインの別の研究を示しながら、近代社会では外見を上げることが自己を上げることになっているからだとして訳注に記している(成実1998, 198)。傍証に過ぎないが、この訳語の採用の経緯からも、ファッションの行為としての側面が強調されていたことがうかがえる。

このように、「ファッション学」以前・以後では、ファッションや流行の捉え方にはっきりとした差異がみられる。

柳(1978)や荻村(1987)などでは、社会現象としての側面を強調するそれまでの見方が採用されていたが、「ファッション学」では相互行為やアイデンティティ構築という側面を強調する見方へと変化したのだ。

(2)「身体」への注目

「ファッション学」の議論の特徴の二つ目は、ファッションを論じる際に身体に焦点をあてたことである。

90年代のファッションに関する議論を先導していたのは鷺田(1989; 1995; 1998b; 2000; 2003)である。一般読者にも広く読まれた複数の著作において鷺田は身体を通してファッションの考察をしている。

鷺田の議論の重要性は衣服を着ないで生活ができない以上、ファッションは一部の人間たちだけではなく誰もが関わるものだと強調した点にある。鷺田はシャワーを浴びることやピアスを開けること、爪を切ることや髪を切ることなどを、衣服を着ることと同様の身体加工として論じることで、ファッション(の議論)が関わる領域を衣服や流行以外にまで拡大させていった。

このように身体に焦点をあてながらファッションを論じるという方向性は、日本語による議論だけの特徴ではない。例えば、Entwistle(2000=2005)は人類学や哲学、社会学などにおいて蓄積されつつあった身体論的議論を踏まえながら、「状況被拘束の身体的実践」として衣服やファッションをとらえる必要性があると強調している。乱暴に云い替えるなら、ファッションを、ファッション

とは無関係にも思えるような文化や社会的な規範の影響を受けながらなされる行為として分析する必要がある、ということである。

「衣服を着るという行為は個人的であると同時に社会的でもある経験なのである」と述べているように (Entwistle 2000=2005, 17), ファッションを個人の趣味や好みに還元するのではなく、社会的なものとしてとらえるべきだという立場が示されている。ファッションは老若男女を問わず誰にとっても問題となるという議論の前提は、鷲田の主張と共通するものである。

また、『モードと身体』(2003)において編者の成実は、「近年、服飾文化についての議論は身体の問題を取り上げることが多くなっている」と当時の状況を説明している (成実 2003, 7)。同書では、理想とされる身体イメージの変遷、テクノロジーが身体にどのようにかかわってきたか、身体装飾 (⇔服を着ること) への意識の歴史的变化などが取り上げられており、ファッションに関する議論の対象が衣服以外に広がっていることがわかる。

このように、90年代後半以降、日本語における議論に限らず、ファッションに関する多くの議論において身体に注目が当てられ、それによって議論が衣服以外にも広がりを見せていた。

ただし、身体に焦点を当てながらファッションが議論されるようになったことの意義は衣服から身体へと分析の視野が広がったことにあるわけではない。ファッションに関する議論において重要であったのは、規範や価値観などの社会的なもの、アイデンティティの提示という個人の行為が交錯する現場こそが身体なのだ、という身体の捉え方の採用であった。

例えば、井上 (2001) は、戦時中に強制されていたと語られることの多い「もんぺ」の受容過程を示しながら、総動員体制下においては「もんぺ」が選択され流行していた (とあって良い状況にあった) ことを詳述している。

一見すると身体とは無関係の議論のように思えるかもしれないが、身体への注目はこの議論において重要な位置を占めている。「もんぺ」が選択される背景にあったものとして挙げられているのは近代的な合理化への流れであり、その合理性が体現されていたものこそ身体であった。服装改善運動などを経て実現された「自家裁縫」という衣服を自分たちで作ることができるという身体的な技術の普及、(ハレ着を含む) 退蔵衣料の更生という問題、さらに、空襲時の身体的活動性 (動きやすさ) の確保の必要性、これら複数の要因が重なった総動員体制下において、結果として選ばれたのが「もんぺ」だったと井上は論じている。

この議論において、身体は規範や権力、慣習や文化などの社会的なものとして身に着けるものを選択するという

個々人の行為が絡まりあう場として位置づけられている。

前述の Entwistle (2000=2005) は邦題が『ファッションと身体』となっているため、身体に焦点化しながらファッションを論じることの意義がタイトルに表れていないが、原題は *The Fashioned Body* であり、文化や社会的な規範の影響を受けながら身体がつくりあげられているということが強調されていた。

ほかにも韓 (2004; 2006) では、朝鮮学校の女子学生が「チマ・チョゴリ制服」を着るようになったプロセスを当事者へのインタビューをもとに考察し、服を着るという行為がエスニシティやナショナリズム、ジェンダーなどの社会的なものに関わりながらアイデンティティを表現する行為であることが、鮮やかに描き出されている。

前項で「ファッション学」では、相互行為やアイデンティティ構築という側面が強調される傾向があると述べたが、身体に焦点をあてて分析することによって、服を着ることや身だしなみを整えるといった個人的かつ日常的な行為を社会的な問題として捉える分析視角が共有されるようになったと云えるだろう。

4. 「ファッション研究」の特徴

前節では1990年代から2000年代初めの「ファッション学」の諸研究を参照し、その特徴を確認してきたが、本節ではおおよそ2000年代後半以降の「ファッション研究」の特徴を「ファッション学」と比較しながら明らかにしていきたい。

(1) 「ファッション学」の継承

「ファッション研究」においても、「ファッション学」の分析視角は継承されている。

井上 (2020) は「人間がどのように身体と付き合い、自分を取り巻く世界を把握し、自分自身を形成し、世界と関係しているかについての理解の仕方」を「ファッションの哲学」と呼び (井上 2020, ii), ファッションを「流行」と「身体」から考える必要性を説いている。

個人とは無関係な社会現象にも思える「流行」は個人の行為の結果であり、極めて個人的なものであるようにみえる「身体」も実際には規範や常識など社会的なものの影響を多分に受けている。だからこそファッションについて考えることは世界を理解することだというのが「ファッションの哲学」の基本姿勢であり、『ファッション学のみかた。』で提示されていた問題意識をはっきりと共有するものである。

服飾文化史の立場から礼儀作法と服装の関わりを詳細に論じた内村 (2013) は、身体を権力や社会的な規範が現れるものとしてとらえられており、「ファッション学」における身体の捉え方を踏まえたものとなっている。

(2) 対象の拡がり 若者文化研究の増加

「ファッション学」の知見や分析視角は継承されているが、注目すべき変化もみられる。まず挙げられるのは分析対象の拡がり、特に、若者文化を取り上げた研究の増加である。

再びファッションが所属階級を示すものになりつつあることを指摘した三浦 (2005)、「族」や「系」という呼称に注目しながら戦後のユース・サブカルチャーの歴史的变化を詳細に検討した難波 (2007)、アイデンティティを仮装する行為としてコスプレをとらえた成実編 (2009)、「ヤンキー」を文化論的に論じた五十嵐編 (2009)、フィールドワークによって「ギャル」のコミュニケーションや価値観を明らかにした荒井 (2009)、「ギャル」と「不思議ちゃん」という二つの特徴的な存在を比較しながら歴史記述を試みた松谷 (2012)などにこの傾向が表れている。

これらは共通して若者文化を取り上げているものだが、分析視角には際立った違いがみられる。「ギャル」や「かまやつ女」といったファッションの系統と階級や意識と関連を分析した三浦 (2005)や複数の視点から文化論的なヤンキー分析を試みた五十嵐編 (2009)では、特定のファッションや特徴的なスタイルの背景にある価値観や文化を明らかにすることが目指されていた。相互行為やアイデンティティ構築という側面への関心は乏しく、ファッションを社会的なものの反映としてとらえている点は「ファッション学」以前の立場に近いといえよう。

一方、難波 (2007)では、「〇〇族」と呼ばれた若者サブカルチャーグループには空間を共有しながら集団的アイデンティティを構築するという特徴があることが指摘され、そのなかでファッションはアイデンティティ構築の資源となっていたと説明されている。また、成実編 (2009)は、コスプレや女装、タトゥーなどを取り上げ、アイデンティティを仮装する行為としてコスプレを分析している。これらの研究は相互行為やアイデンティティ構築に着目するという点で「ファッション学」の分析視角を継承している。

(3) 分析視角の変化 相互行為への注目

3節2項で詳述したように、「ファッション学」においては社会的なものと個人の行為が交錯する場としてファッションがとらえられてきた。一方、「ファッション研究」においては相互行為に注目することの必要性が強調される傾向がある。

必ずしもファッションに焦点が絞られたものではないが、難波 (2007)はこのような「ファッション研究」への変化を示すものである。戦後のサブカルチャー集団の成立においては階級や世代という社会的なものが重要な

要因となっていたが、徐々に集団形成においてけるそれらの重要性が低下していったことを難波は指摘している。そして、これを象徴するものとして「〇〇族」から「〇〇系」へというサブカルチャー集団の呼称の変化があったと説明している。

空間を共有しながら集団的アイデンティティを形成することに特徴のあった「〇〇族」において、ファッションはそのアイデンティティを示す資源であった。その後、「〇〇系」の使用が広がるにつれて、複数の「〇〇系」ファッションを日によって使い分けるケースも見られるようになったと難波は事例を挙げながら述べている。

これはファッションとアイデンティティ構築の関係性が弱まったことを示す傍証といえることができる。このような変化については、難波 (2007)のような歴史研究だけではなく、質問紙調査を用いた研究においても指摘されている。

差異化を伴う自己表現としてファッションをとらえる見方の理論的源泉には、Simmel (1911=1976)やBourdieu (1979=1990)など階級を前提とする理論だけではなく、ファッションを含むあらゆる財やサービスが差異化の「記号」となると考えるBaudrillard流の消費社会論も含まれる (Baudrillard 1970=1995)。

消費社会の特徴であるこのような果てしない差異化を「差別化の悪夢」と呼んだ上野 (1987)を踏まえ、差異化を伴う自己表現としてファッションをとらえる見方の妥当性を、質問紙調査をもとに検討したのが工藤 (2017; 2019)である。

工藤は調査結果を分析し、ファッションを自己表現と捉えないにもかかわらず差異化をはかろうとする傾向が一部にみられることを指摘している。この結果に対して、ファストファッションが普及し衣服の流通量が過去25年間で倍増し平均価格も下がった2010年には、ファッションから距離をとること (完全に無関心であること) 自体が困難になってきており、それが逆にファッションによってアイデンティティを構築するというコミュニケーション自体を避ける (ファッションが似てしまうことでファッションにかかわるコミュニケーションに参加せざるを得ない状況避けるために差異化をはかる) 傾向につながっていると説明している。

2000年以降のファッションをめぐる環境の変化として挙げられるのは、ファストファッションの普及である。ユニクロを着ていることが露見することを意味する「ユニバレ」がもはや気にされることもなくなった現状を、米澤 (2019)はファッションが「差異化の道具」から「共感の道具」へと変わったと説明し、ユニクロが差異化を志向し個性的な服を着ようとするような「ファッションの魔法を解いた」と述べている。

3節2項で述べた通り、「ファッション学」において強調されていたのは、身体という場において規範などの社会的なものと個人の相互行為が交錯することであり、だからこそファッションは注目するに値する、という認識であった。

一方、工藤や米澤が指摘しているのは社会規範や個人のアイデンティティといった意味と関連づけてファッションを理解しようとする分析視角が失効しつつあるのではないか、という点である。

社会規範や個人の主体的行為としてファッションをみなすことに対する批判は身体に注目した研究においてもなされている。

美容整形を美容実践と関連づけながら検討した谷本(2018)は美容整形を希望する理由として「自己満足」という回答が多いことを示しながら、自己満足のために美容整形を希望する自己とはどのようなものかを、質問紙調査によって検討している。

調査では美容整形をアイデンティティ構築のための主体的な行為と捉える英語圏における先行研究を踏まえて質問項目が作成されたが、「自己の主体性」を前提とした変数は美容整形などの美容実践の希望には影響していないことが明らかとなった。

谷本の分析ではインタビュー調査も併用されているが、インタビュー調査から明らかとなったのは、日常的なコミュニケーションが美容整形実践の契機(きっかけ)となっているということであった。そして、美容整形を「主体的な」行為とみなし、行為を規定する社会的変数や動機を解明しようとする研究の方向性には限界があることを指摘し、「何気ない日常生活」における相互行為に注目する必要があることを強調している。

何気ない日常生活への注目は、デジタル技術を介したコミュニケーションの研究においても指摘されている。久保(2019)はプリクラの顔写真を加工することから始まった「盛り」に関する研究において、若い女性が目を大きく見せようとするメイクをする背景にあるのは、規範や思想ではなく「加工のしやすさ」だと述べている。

「ファッション学」において身体は、規範や権力といった社会的なもの個々人の行為が絡まりあう場として位置づけられていたが、谷本(2018)や久保(2019)が指摘しているのは、このように意味や価値が交錯する場として身体やファッションを捉えることが適切ではない可能性があるという点である。より具体的には、日常的な会話や身の周りの道具こそが、現在においては身体のあり様に影響を与えている可能性があるということである。

このように、「ファッション学」では規範と主体的行為の交錯(社会的なものと個人の緊張関係)に注目が向けられてきたが、「ファッション研究」では日常でなされ

ている相互行為へと分析の焦点が変化している。

(4) 西洋近代的システムとしてのファッションの相対化

「ファッション学」にはファッションをヨーロッパ(特にパリ)中心でとらえる見方があると指摘したが、「ファッション研究」ではこのような見方の相対化が試みられている。

例えば、平芳(2018)は、このような西洋近代的システムというファッションの見方が前提とされてきたことで、なぜ近代においてはファッションが「女性のもの」となったかという問いが問われずにきたと指摘している。

ヨーロッパ中心の見方が、近代という時代区分を基準に歴史記述がなされてきたことの効果であるという点は、歴史学からも指摘されている(山下編2019)。Rocamora and Smelik eds(2016=2018)などのファッション研究における相対化の傾向は、このような知的潮流を踏まえたものである。

論文や書籍等の「書かれた研究」以外では、2019年に開催された京都服飾文化財団(KCI)の企画展「ドレス・コード?」展も、相対化の試みの一つといえる。これまでは、「ファッション学」的な西洋近現代服飾史の流れにコムデギャルソンやヨウジヤマモトなどのブランドをいかに接続させるかという展示構成が繰り返されてきたが、「ドレス・コード?」展では「他人の眼を気にしなければならぬ?」など日常にあふれる13の「ドレス・コード」から展示を構成することで、ヨーロッパ中心的な服飾史を相対化するものとなっていた。

5. まとめ

「ファッション研究」の研究動向を最後に改めて確認しよう。前節では「ファッション研究」の特徴として相互行為への注目という分析視角、および、西洋近代システムとしてファッションを捉える見方の相対化する傾向を挙げた。

注意すべきは、この二つの特徴はそれぞれが独立したものではなく相互に関連しているという点である。

質問紙調査を用いた谷本(2018)や工藤(2017;2019)は、ファッションを西洋近代システムと捉える研究を踏まえて質問項目が作成されているが、導き出された知見は美容実践に「自己の主体性」に関わる変数が影響していないことやコミュニケーションを避けるために衣服の差異化が図られているというものであり、これまでの研究の理論的前提そのものを問い直す必要性を示唆するものであった。

そして、アイデンティティや規範ではなく、日常的な相互行為に注目すべきだという指摘は、このような知見に基づいて出されたものであった。

本稿では詳述できなかったが、数年来「見た目問題」として問題化されていることは日常的な相互行為の問題として取り上げられるべき対象である。「見た目」が問題となることそれ自体が解決されるべき問題だとする対象の捉え方は、日常的な相互行為に注目すべきと指摘する「ファッション研究」の指摘と重なる部分が多い。

「ファッション」という語でイメージされるものとは異なるかもしれないが、このような極めて日常的な問題が「ファッション研究」の知見を用いながら、今後は検討されていくと考えられる。

文 献

- 荒井悠介 (2009). ギャルとギャル男の文化人類学. 新潮社.
- Baudrillard, J. (1970). *La société de consommation: ses mythes, ses structures*. Denoël. (今村仁司, 塚原史訳 (1995). 消費社会の神話と構造 普及版. 紀伊國屋書店).
- Bourdieu, P. (1979). *La distinction: critique sociale du jugement*. Paris. Éditions de Minuit (石井洋二郎訳, (1990). デイスタクシオン——社会的判断力批判 I. デイスタクシオン——社会的判断力批判 II. 藤原書店.).
- Entwistle, J. (2000). *The Fashioned Body: Fashion, Dress and Modern Social Theory*. Polity Press (鈴木信雄監訳 (2005). ファッションと身体. 日本経済評論社).
- 藤嶋陽子 (2019). ファッション研究史とファッション産業史の交錯点——日本における研究展開の駆動力としての産業. *Vanitas——ファッションの批評誌*. Vol. 6, 88-99.
- Finkelstein, J. (1996). *After a Fashion*. (成実弘至訳 (1998). ファッションの文化社会学. せりか書房).
- 深井晃子 (1994). 20世紀モードの軌跡. 文化出版局.
- 韓東賢 (2004). “着衣によるエスニック・アイデンティティの表現とジェンダー——チマ・チョゴリ制服誕生をめぐるエイジェンシーとコロニアリズム”. 伊藤守編. 文化の実践, 文化の研究——増殖するカルチュラルスタディーズ. せりか書房, 106-120.
- 韓東賢 (2006). チマ・チョゴリ制服の民族誌——その誕生と朝鮮学校の女性たち. 双風舎.
- 平芳裕子 (2018). まなざしの装置——ファッションと近代アメリカ. 青土社.
- 五十嵐太郎編 (2009). ヤンキー文化論序説. 河出書房新社.
- 井上雅人 (2001). 洋服と日本人——国民服というモード (廣済堂ライブラリー). 廣済堂.
- 井上雅人 (2020). ファッションの哲学. ミネルヴァ書房.
- 柏木博 (1998). ファッションの20世紀——都市・消費・性. (NHK ブックス). 日本放送出版協会.
- 北山晴一 (1999). 衣服は肉体になにを与えたか——現代モードの社会学. 朝日新聞社.
- 北山晴一, 酒井豊子 (2000). 現代モード論. 放送大学教育振興会.
- 工藤雅人 (2017). “『差別化という悪夢』から目覚めることはできるか?”. 社会にとって趣味とは何か——文化社会学の方法規準. 北田暁大・解体研編. 河出書房新社, 205-29.
- 工藤雅人 (2019). “〈都市的なもの〉としてのファッションの変容——「可視化の実践」から「不可視化の実践」へ”. *アーバンカルチャーズ——誘惑する都市文化, 記憶する都市文化*. 岡井崇之編. 晃洋書房, 20-37.
- 久保友香 (2019). 「盛り」の誕生——女の子とテクノロジーが生んだ日本の美意識. 太田出版.
- 松谷創一郎 (2012). ギャルと不思議ちゃん論——女の子たちの三十年戦争. 原書房.
- 三浦展 (2005). 「かまやつ女」の時代——女性格差社会の到来. 牧野出版.
- 中川早苗 (1996). “被服学の世界”. *ファッション学のみかた*. 朝日新聞社, 128-131.
- 難波功士 (2007). 族の系譜学——ユース・サブカルチャーズの戦後史. 青弓社.
- 成実弘至 (1998). “訳注”. *ファッションの文化社会学*. せりか書房, 196-204.
- 成実弘至 (2003). “身体モードとしてのファッション”. *モードと身体——ファッション文化の歴史と現在*. 成実弘至編. 角川書店, 7-16.
- 成実弘至 (2007). 20世紀ファッションの文化史——時代をつくった10人. 河出書房新社.
- 成実弘至編 (2009). *コスプレする社会——サブカルチャーの身体文化*. せりか書房.
- 小形道正 (2013). “ファッションを語る方法と課題——消費・身体・メディアを越えて”. *社会学評論*. Vol. 63, No. 4, 487-502.
- 荻村昭典 (1987). 服装学への道しるべ——服装社会学入門. 文化出版局.
- Perrot, P. (1981). *Les dessus et les dessous de la bourgeoisie: une histoire du vêtement au XIXe siècle*. Fayard (大矢タカヤス訳 (1985). 衣服のアルケオロジー——服装からみた19世紀フランス社会の差異構造. 文化出版局).
- Rocamora, A; Smelik, A eds. (2016). *Thinking through fashion: a guide to key theorists*. London. I.B. Tauris (蘆田裕史監訳 (2018). ファッションと哲学——16人の思想家から学ぶファッション論入門. フィルムアート社).
- Simmel, G. (1911). *Philosophische Kultur: Gesammelte Essays*. Leipzig. Alfred Kröner (円子 修平, 大久保健治訳 (1976). ジンメル著作集7 文化の哲学. 白水社).
- 谷本奈穂 (2018). 美容整形というコミュニケーション——社会規範と自己満足を越えて. 花伝社.
- 内村理奈 (2013). モードの身体史——近世フランスの服飾にみる清潔・ふるまい・逸脱の文化. 悠書館.
- 上野千鶴子 (1987). <私>探しゲーム. 筑摩書房.
- 鷺田清一 (1989). モードの迷宮. 中央公論社.
- 鷺田清一 (1995). ちぐはぐな身体——ファッションって

- 何？. 筑摩書房.
- 鷺田清一 (1996). “『うわべの学問』と考える人に, この本は無用である. ——ファッション学への誘い”. ファッション学のみかた. 朝日新聞社, 4-8.
- 鷺田清一 (1998a). “スタイルを生産する「個性」”. ファッション学のすべて. 鷺田清一編. 新書館, 8-14.
- 鷺田清一 (1998b). ひとはなぜ服を着るのか. 日本放送出版協会.
- 鷺田清一 (2000). てつがくを着て, まちを歩こう——ファッション考現学. 角川書店.
- 鷺田清一 (2003). “意識の皮膚——ファッションと身体”. モードと身体——ファッション文化の歴史と現在. 成実弘至編. 角川書店, 36-61.
- 山田登世子 (1992). モードの帝国. 筑摩書房.
- 山田登世子 (1997). ファッションの技法. 講談社.
- 山下範久編 (2019). 教養としての世界史の学び方. 東洋経済新報社.
- 柳洋子 (1978). 流行の構造——制服社会からファッション化社会へ. 文化出版局.
- 米澤泉 (2019). おしゃれ嫌い——私たちがユニクロを選ぶ本当の理由 (幻冬舎新書). 幻冬舎.
- 横川公子 (1996). “生活美学の歴史”. ファッション学のみかた. 朝日新聞社, 132-135.